

気象を通じて美しい世界を作ろう



福 島 要 一

わが国は、天災の多いので有名である。昔は地震かみなりがこわいものの代表になっていたが、今ではかみなりを怖がるものは少なくなった。地震は恐ろしい災害だが、そう度々あるわけではない。むしろこわいのは、台風による洪水だろう。山をくづし、家を流し、田を埋め、人も家畜の死傷も多い。しかもそれが年々才々やつて来るのである。日本は天災の多い国と云われるのは、近頃では主としてこの被害について云われるようである。

しかし台風、洪水程ではないが、その他に尙いろいろの災害がある。暴風による被害は、特に海で働く人々には恐ろしいものである。又洪水とは逆に、ひでりの害もある。近年はそれほどでもないが、ひでりの時の農民の苦しさは、傍で見ていられない。東北、北海道にかけては、雪の害、寒風の害があり、又春先には霜の害も起る。雨が足りなければ、ひでりになるが、多すぎると、こんどは日光の不足による害が起る。夏になると害がないかという、雹がふつて、田や畑をめちやめちやにしてしまう。これらの害は、都会に住んでいる人達には、それほどにも感じられないが、農村の人々や漁村の人々は、毎日の天気、一喜一憂である。

測候所の天気予報についても、都会の人は、雨傘をもつて家を出るか出ないかの決心をつけるだけだが、農、漁村の人たちが、却つて注意深い。思いもかけず、山の人などに気象のはなしをきかれることもある。天候は特に、産業に大きい関係があり、その意味で、ほんとに国の生産に関心のある人々にとっては、必ず注意すべき問題である。

農作物の被害は、ふつりの人の考えているより案外大きいもので、米だけとつて見ても、年々一千万石前後である。一千万石という国全体の平均の生産高が六千万石位だから、全生産の二割近くがほとんど毎年、災害によつて失われているという訳である。これだけの災害がなくなれば、それだけでも、わが国の食糧はかんたんに自給できるといつても過言ではない。もちろんこの災害は全部は直接天候によるものではなく、病気や、害虫によるものも大きいのだが、その病気や害虫さえも、殆んど気象条件によつて、左右されるといつてもよい。

だから都会の人々も健康な人達は、あまり日々の天候

を気にしないとしても療養中の人や、身体の悪い人には直接にその日その日の天候がひびいて来る。永い期間の間には、丈夫な人に対しても、天候は影響せずにはない。われわれはもつと、われわれを取りかこんでいる、気象環境に注意を向けなければならないのである。

しかし一般には、前にものべたように、農村や漁村の人に比べて都会の人などが却つてこの気象についての関心がやすい。その理由は二つあると思う。第一は、都会の人々は、ある程度、自分で、自分の住んでいる環境を人間的に調節しているという点によるものであり、第二は、これとは全然逆に、天の大きな気象関係は、人間の力ではどうにもならないのだという考え方をとつているからだと思う。

この二つの考え方は、明に、全くむじゆんしている。そしてこうした考え方は、日本人の非社会的な考え方とつながっている。自分の家さえ温かければ、よその家はどうなつてもかまわない、といったような個人主義が、こんなところまで支配している。更にこの考え方は、非常に、非科学的である。小さい気象条件が、人間の力である程度克服し得るとしたら、より大きな気象条件だつて人間の力で変えられない筈はない。要するにこれは程度の問題である。

こういう風に考えて来ると、大げさな云い方のようだが、人間は、もつと天然の気象の問題について、関心を持つ義務があるとも云えるように思う。小さい自分の都会の気象条件から、広く日本全体の気象条件まで、たえず関心をもつて、そのよい影響力を極度に利用し、その悪い条件を少しでも克服して行くということが、それが人間の進むべき根本の方向だとさえ云える。

アメリカの土壤保全や、ソ連や中国の自然改造は、いづれも、天然自然の気象条件をよく研究して、その法則をもつて、天然の気象まで変えて行くという精神であり、この精神が一方では、家庭内の生活条件を、もつとも健康的に調節しようという、人間の生活の向上に結びついているのであつて、単に壮大な夢という風にのみ考えてはならぬ。そこにはやはり人間を大切に、自然の暴力も人間の力でやわらげ、或はむしろ積極的に利用する精神が根柢に在ると考えなければならぬ。

事務室や工場環境の調節が、直接間接にどれだけ生

産を大きくしているかしのれない。そうした環境調節が、
登山や、農業全体に亘るようになってきたら、われわれの生活は
どれほど豊になることか。それこそバイブルにある、蜜とミルクの
流れる国になるであろう。

これらの理想は、決して気象を学問として研究している人
たちだけの力では到達できない。この気象の知識がすべての日本人の
常識になり、そうした常識の中から生れて来る、非常に広い範囲の
資料があつまつて、はじめて立派な仕事ができるようになる、この
意味で、この気象の知識の普及は大切なことである。

その上この気象の仕事は、実は一つの国の人々の力だけで完成
しないという面もある。世界が平和であつて、あらゆる国々がお互
にその情報を交換し合うような社会にならぬと、ほんとうのよい結
果は得られない。この意味から云つてこの仕事は、結局世界の人を
結びつける、平和の学問である。われわれは、気象を通じて、こ
うした美しい理想の獲得できる事をねがうものであり、その方向
に現実を動いている事を確信しているものである。

(日本学術会議議員)

写真解説

「曙光のマナスル」

毎日新聞社写真部員 マナスル登山隊員 依田孝喜氏
撮影、スピードグラフィックEKスーパーXX名刺版、
赤フィルター十時望遠、F5.6 1/10秒、1953年6月1日
5時30分。

ベースキャンプより望遠したマナスルです。こちらから
見ると丁度谷川岳の頂上が耳二つと呼ばれるような、
双耳峰に見えますが、右手は7,800mのピナクルで、
左手が8,125mの頂上です。三田隊はこの頂上から右に
引くプラトートをピナクルより稍低い所迄登つたわけ
です。双峰とも西風で雪煙を揚げています。久米氏の研究
に依ればアソナプルナに雪煙の観測された日には、ニ
ューデリーの7軒の風が20米秒以上であつたそうです。
朝日の当つているのは7,000米以上で、その以下の東尾
根は左に薄く見えています。左に残月がありますが月面
の模様ははつきり写つたのはこれだけだと云う。依田氏
快心の作で、本誌のために特にお願いして御提供を願つ
たものです。

(大井記)

稚内の冬

岩田育左右

本邦のツンデ観測網の最北端に位置している「稚内」
を語るに、まず冬の景物を云々せずしては一向に興なき
こととなる。

暖候期はいそぎ足で去り、大陸高気圧の発達するの
にしたがい吹き募る季節風と共に、灰色の冬はここに訪れ
る。

本州ではさしずめ行楽期の秋たけなわのころ稚内では
すでに降雪がはじまり、11月初旬ともなればそれが根
雪となるのであるが、この根雪は翌年の4月初旬までは
消え去らない。ながいあいだ鉛色の雲でおほわれるわれ
われの鬱積した生活に、この純白の根雪は幾分なりとも
明るさを与えている。しかしそれは凍てつくような吹雪
が、とき折りは休止しているときだけのことであつて、
決して長続きはしない。

気象観測に携る身として、暖を慕い涼を追う人情には何
ら変るところはない。われわれが冬季間もつとも苦手と
するものは、何といつても寒波の襲来と吹雪の連続であ
らう。

内地では暖冬異変と云われている今冬、ここでは例年
にない寒さに見舞われ、稚内の最低気温は氷点下19.1度

という10年振りの低温で、近在の内陸部では実に氷点
下36度まで下降した。

このような寒波では無論水道栓は固く凍り鉄管破裂な
どのため飲料水に不自由することさえある。また鉄道で
は車軸の油が凍りついて、列車の操車不能による物資輸
送の不円滑もとき折り報ぜられている。

われわれはかような寒さのなかで、しかも寸尺を分た
ぬ吹雪に煽られながら、毎日毎時定められた仕事に奉仕
しているということについて、まことに以て尊いこと
であるということをしみじみと自覚せしめられる。

本州の人が北海道の一部を見聞して、その生活面の一
端を評するとき、暖房がゆきとどき室内が暖かいので本
州の冬よりは余程すごいよように語るのを耳にする。
たしかに北海道では如何な貧乏人でもストーブをもち、
炉辺に入つとえば談笑の花の咲くこともあり、本州の人
々の味うことの出来ぬ楽しみもあろう。しかし、それ
には保健衛生と、経済的時間的消費、加うるに荒涼たる
外界によつて受ける生活上の制約などの大きな代償を支
拂つてのことである。

また文能の士は云う「荒涼たる冬の景物にも格別の味
わいがある」とか。現実を直視することしかできないわ
れわれには、恨めしいほどに落ちついた言葉である。妖
獣の如き唸りを伴つた吹雪の明け暮れでは、かような乙
なことは云つていられない。けだし直径2メートルほど
の気球にしがみつき、首尾よく放球できるまでは何ん
としても破裂させまいと努める高層観測員の労苦は、筆
を以て簡単には表現できるものではない。

稚内の雪は大体本州のそれに較べて細かく、かつ湿つ
ていないので風速が7~8メートルになれば、たちまち
にして吹雪となり視界を遮切つてしまふ。

朝、眼を覚ませばこれらの雪片がどこからともなく室
内に吹き込んでいて、枕もとにはいつしか白い雪華が、
また窓ガラスには霜花がひきつたように咲いているこ
とも多い。

1メートルあまりもある氷柱の暖簾をくぐり、体を没す
ほどの吹き溜りを排しながら、泳ぐようにして職場に
急ぐ酷寒地のわれわれに「冬来りなば春遠からじ」とは
実際ではなく、単にみづからを慰めるための言葉でしか
ない。

(稚内測高層係長) (1954年3月)